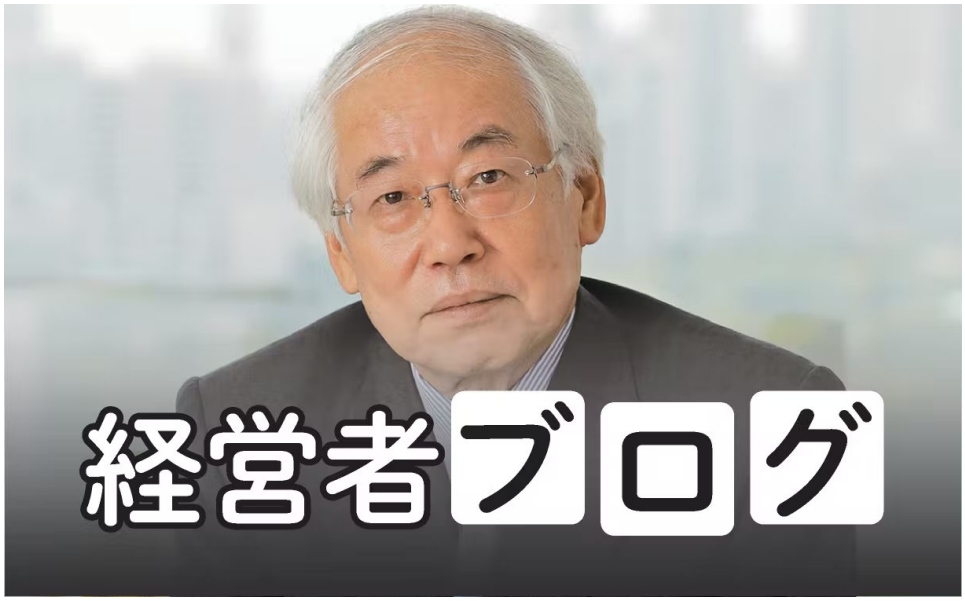
心を癒やす文化・芸術　災害やパンデミック下の支えに

経営者ブログ　鈴木幸一　IIJ会長

2022/2/22 2:00 | 日本経済新聞　電子版



毎週このブログを書きながら気になっているのだが、なぜか新型コロナウイルスの世界的大流行（パンデミック）に触れている。そう思いながら先週の木曜日、延び延びになっていた3回目のワクチンの接種を受け、前回より辛い症状に襲われたのである。

■3回目のワクチン接種で高熱に

接種した深夜、熱が出始め、38.7度になった。なかなか熱が下がらず、明け方まで高熱が続いた。先週は私の接種よりも、訪日する海外の人々に対し、訪日後の隔離期間が7日間から3日間に短縮されたとの発表があった。

ジュリアン

私が主宰しており、3月中旬に始まる「東京・春・音楽祭」への訪日が危ぶまれていた海外演奏家の具体的な日程調整が、ようやく形になり始めた。旅券をはじめ、あらゆる作業に追われ、事務局は寝る間もないほど振り回されている。

2020年、21年とパンデミックの厳しい状況が続き、多くの公演が中止に追い込まれながら、可能な限りの演奏会を実現してきたのだが、どの演奏会も針の穴を通すような難しい状況だった。

「音楽祭のような不要不急とされる文化事業こそ、続けることがもっとも大切である。質の高い演奏会を続けることによって、世界でも認められる音楽祭となる」。第2回の音楽祭に、ヴェルディの「レクイエム」を指揮していただいたリッカルド・ムーティさんの言葉である。「東京・春・音楽祭」は22年で18回目となる。

■苦しい状況下でも続けることが大切

ムーティさんが一番大切なこととして話されたのが、「どんな苦しい状況に遭遇しても、続けることである。ザルツブルク音楽祭、バイロイト音楽祭のような世界的な音楽祭が今日あるのは、苦しく、厳しい状況にある時も続けてきたからこそだ。文化や芸術は人間にとって最も大切なことなのだが、経済危機をはじめ、世界が厳しい環境に陥った時、まず切り捨てられたり、見捨てられたりする。そのことを十分に覚悟してこの音楽祭を続け、将来は世界有数の音楽祭にしてほしい」。

クリスマスローズ

毎年、年が明け、早春の冷たい大気に沈丁花の香りが肌に触れる頃になると、20年以上も昔、ムーティさんと話した会話を鮮烈な記憶として思い出す。ムーティさんのそんな思いがつながったのか、東日本大震災の折は、日本公演が中止となってサンクトペテルブルクに滞在していた指揮者のズービン・メータさんに、急きょ再来日をお願いした。

まだ余震が残る東京文化会館で、NHK交響楽団とベートーベンの「交響曲第9番」を演奏していただいた。演奏家、聴衆、立ち会った人すべてが、一人残らずと言っていいほど、涙を流すほどの演奏会となった。たまにメータさんにお目にかかると、いまだにこの演奏について話される。過酷な自然災害に対し、まず心を癒やしてくれるのは文化であり、芸術なのである。

一方、なにか事があると、まず切り捨てられるのも、文化や芸術の分野でもある。破壊された公共施設や建造物を再建するのは、文化や芸術の役割ではないのだが、ある意味、もっとも大切な「人の心」を慰め、癒やしを与えてくれるのは、文化や芸術である。文化や芸術を安易に切り捨てる習慣を捨てないと、人々の気持ちや心がすさむことで、国の将来を根底から危うくするのである。

■震災の折には合唱団と被災地を回る

東日本大震災が起きた11年は、4月に音楽祭が終わってすぐ、音楽祭の事務局のスタッフがバスを用意し、合唱団と被災地の病院などを回った。その折の話を今でも時々、思い起こしたりする。辛うじてバスが通れる程度の道をたどって、被災の中心となった地域の病院や役場に寄っては、小さなコンサートを繰り返したのである。文部省唱歌をはじめ、高齢化が進む地域の人々がよく知る選曲である。

ストック

「被災者が一番感動するのは『仰げば尊し』だから、その歌を最後にすべきだよ」。私の助言に、いまや卒業式にも歌う学校が少なくなった「仰げば尊し」の評価については、納得ができないようだったのだが、現地では昔ながらの卒業式の歌を始めると、どの会場も涙であふれてしまったそうだ。

その際、いまだに記憶から消え去らない話がある。病院や緊急の治療に追われている場所で演奏をすると、真っ先に涙が止まらなくなってしまうのが患者さんではなく、昼夜、厳しい勤務を強いられている医師や看護師さんだったそうだ。

東日本大震災の折は自粛ムードが社会を覆ってしまい、暗くしているのが社会的に常識をわきまえた行動を求めるといった風潮があった気がして、音楽祭を始めるにも勇気が必要だった記憶がある。パンデミックについても、似たような思いを抱くこともある。

ペストは歴史的に最大のパンデミックといえる。新型コロナ禍と同じく都市が封鎖されたり、感染者や死者が記録され中央政府に情報が集められたりした。そんなことを考えながら、過去に写し取った仏思想家ミシェル・フーコーの文章をふと思い出した。

「個体性の解体としてのペスト文学。そこには、個体性が解体し、法が忘れる瞬間としての、ディオニソス祭的なペストという夢があります。ペストが始まる瞬間、それは、都市においてあらゆる規則性が取り除かれる瞬間である。ペストは、身体を犯すように、法を犯す、少なくともこれが、ペストの文学的な夢です。しかし、ペストについてのもう一つ別の夢があります。それは、政治権力が完全なかたちで行使される見事な瞬間としてのペストという、政治的な夢です」

【関連記事】
・「コロナ鎖国」の緩和方針にほっとする
・パンデミックがつくる新しい社会？

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.